

地方国際芸術祭は誰の／何のためのものなのか

山田 香織 (東洋大学)

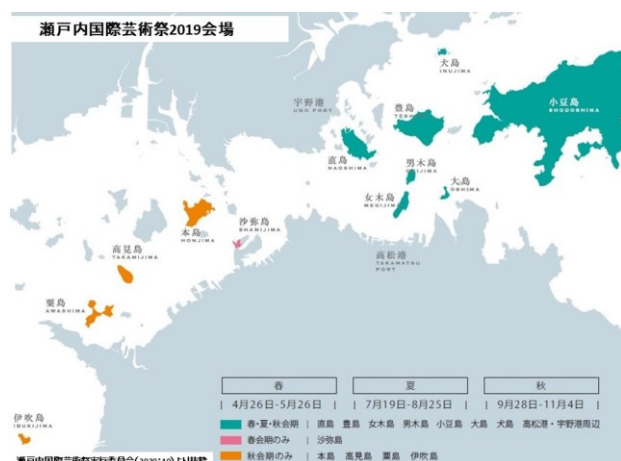
Keyword : アートツーリズム、地域振興、地域化、楽しみ

【問題・目的・背景】

1. 問題の所在

過疎高齢化の著しい中山間地域や離島に、一流アーティストが手がけるサイト・スペシフィックなアート作品を設置することで、これまで生じることがほとんどなかったヒト・モノ・カネの移動を生じさせ、地域振興を促進しようとする動き(=地方国際芸術祭の開催)が、2010年以降日本国内各地で盛んにみられるようになった。これらは、政府の地方創生とも少なからず絡み合いながら進展してきたアートツーリズム事業とあってよいだろう。一方、ここ最近の地方国際芸術祭の開催状況に目をやると、新設ラッシュの時期は過ぎ、既存芸術祭の継続・維持・洗練の時期に突入した感がある。

発表者は数年来、瀬戸内国際芸術祭に関し、住民のそれへの関わりや、当該社会へのインパクトの観点から定点観測をおこなってきた。地方国際芸術祭のなかでも成功事例のひとつとして挙げられることが珍しくないこの芸術祭は、2019年に4回目を迎えた。第4回は春・夏・秋の3会期(107日)にわたり、12の離島と2つの港において(図表1)214点のアート作品の展示とそれに付随する35のイベントなどが実施された[瀬戸内国際芸術祭実行委員会 2020]。



図表1 瀬戸内国際芸術祭 2019 会場分布

今回も開催場所や開催方法(3会期制、パスポート販売、ボランティアによる運営支援、組織体制、予算規模等)は、概ねこれまでのスタイルを踏襲しており、これに、さらなるサービス(例:3日間有効のフェリー乗船券やガイドツアーの販売)が追加された。この結果、来場者数は118万

人を数え、第3回との比較で14万人増、経済効果は180億円、前回比41億円(30%)増であった[瀬戸内国際芸術祭実行委員会 2020, 日本銀行高松支店他 2020]。

同芸術祭は、実施期間・会場・運営体制が固定化し、来場者数と経済効果は右肩上がりの傾向を固持している。また、ブランディングは成功し、知名度も獲得し、着実に前進していると推察できる[瀬戸内国際芸術祭実行委員会 2020]。さらに、本芸術祭の実施の一翼を自治体が担っていることから、同芸術祭の観光客誘致ならびにハード・ソフト面での環境整備を県・市の産業・観光振興施策、文化振興、そして離島振興施策と連動させ、相当に効果的に展開している[香川県 2015, 2017, 香川県商工労働部産業政策課 2013, 香川県政策部文化芸術局 2018]。こうしてみると、同芸術祭は、いまや3年に一度の観光による地域振興のための恒例イベントとして定着したといってもよいだろう。

しかしながら、同芸術祭をアートツーリズムによる地域振興の機会と捉え、会場となるそれぞれの離島に目をむけてみると、各島(場合によっては離島がある自治体)の事情によってその様相にはかなりの異なりがあるといえる。発表者はその背景に、たとえば、会期外でも一定程度の集客を見込めるアートコンテンツの有無にあると推察する。例えば、芸術祭会期外でも恒常的に鑑賞可能なアートサイトを有している直島・豊島と、それ以外の島々(もちろん鑑賞可能な作品は存在するが)では、状況に大きな相違がある。前者にあつては、アート鑑賞を目的とした来訪者が常時存在することから、アートツーリズムは3年に一度に限定しない、常態的な経済効果・雇用創出を創出している。対して、これ以外のほぼすべての離島においては、万を数える来訪者を迎えることは3年に一度のみで、作品鑑賞を目的とした来訪者はいないわけではないが、会期外の生業としてアートツーリズムが機能するまでには至っていない。

さて、では、芸術祭としては概ね順調に次なるステージに歩を進めているようにみえる一方で、個別の離島の実情をみていくと、そこにはかなりの相違があるようにも映るこの状況をどう捉えたらよいのだろうか。とくに、後者に類型される離島での芸術祭の開催には、いかなる価値があるのだろうか。住民たちは、芸術祭にどうかかわり、これ

をどう解釈しているのだろうか。こうした問いは、芸術祭が開始当初に問われることが少なくないが、あえてこうした時点において検討することにも、芸術祭とこれをめぐる実践の今後の維持・洗練を考える上で意義あるものと考えらる。

以下では、これまで発表者が調査をおこなってきた、後者に類型されるある離島での芸術祭にかかわる実践に着目することで、次なるステージに突入したこの芸術祭の意義と役割について考察する。

2. 参照点としての「地域化」の概念

上記の問いを考えていく上での糸口として、本発表では、観光人類学者である橋本和也が論じる地域化の概念を援用してみたい。橋本は『地域文化観光論』のなかで、地域化を「あらゆる文化において見られる現象」と断ったうえで、「外来の要素が地域の人々によって受容され、育まれる過程を「ローカル化」といい、さらに地域の人々の活動によって地域のものとなっていく過程を「土着化」と定義し、地域文化観光論の立場からこの二つの過程を「地域化」と言い換えている[橋本 2018:37]。そして橋本は、この「地域化」の考え方をを用いることで、地域芸術祭の地域文化化の度合いを図ることに挑戦しており、本発表でも扱う瀬戸内国際芸術祭の地域化達成は、「すべての実権を地域の人々が握り、企画・運営の後継者の育成もおこない。経済的にも社会的にも自立し、さらに参加者であるアーティストの育成も地域でおこなうようになり、現代アートとそれによる芸術祭が「自分たちの文化」となっている状態」であると明示している[橋本 2018:159]。本発表で扱う事例をこの尺度で捉えると、何が浮き彫りとなるのか。

3. 調査地概観

(1) 会場となるA島における瀬戸内国際芸術祭

本発表で取り上げる調査地は、同芸術祭での秋会期に会場となる香川県西部の離島Aである。A島のあるB市は、人口62,116人(2020年5月時点)の2006年に7町が合併して誕生した自治体である。主産業は農業と工業で、観光産業への着手、推進は躊躇についたところである。

A島は古くは廻船業の島、戦前戦後は海員学校の島、外国航路の船乗りの島として栄えた島である。しかし、現在は、300人弱にまで人口が減少し、高齢化率は9割を超えている(2010年度国勢調査)。島への移動は、定期船もしくは海上タクシーである。対岸のS港から約15分、定期船は

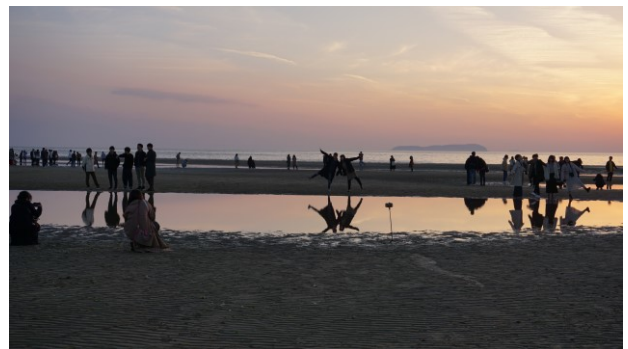
往復8便が運航している。島内には、公民館が1つ、市が運営する宿泊施設が1つ、郵便局が1つ、商店が1つある。

このA島が瀬戸内国際芸術祭の会場となったのは、芸術祭第2回(2013年)からである。第3回(2016年)の芸術祭においては、8作品の展示と1つのパフォーマンス披露があり、秋のみ(30日間)で約2.3万人が来島した。通常、アーティストの指名はアートディレクターや実行委員会がおこなうのだが、第3回においてA島では、島民が自島の芸術祭アーティストとして、それまでA島でアート活動を行ってきた「わたしたちのアーティスト」を推すという動きが見られた[山田 2019]。同島では、住民の要請に応じるかたちで、市独自プロジェクトとして瀬戸内国際芸術祭開始当初から毎年、アーティスト・イン・レジデンス(AIR)も展開されていて、島民の有志が作品制作に従事するのが恒例にもなっている[山田2017]。

第4回(2019年)芸術祭においては、新旧10の公式作品が展示され、また、2つイベントがおこなわれ、会期中は、通常は運航していない、隣接するアート作品のある離島との航路が開設され、ツアーも催行された。結果、来訪者は29,561人(前回比125%、5,893人増)を数えた。

(2) 新たな観光資源の創出

B市の近年の動向として看過できない出来事が、新たな観光資源に対する熱いまなざしである。数年前まではどこにでもある遠浅の海水浴場だった浜辺が、条件が揃うと南米ボリビアにあるウユニ塩湖のような写真の撮れるイン



スタ映えスポットとして2017年頃から有名になり、2019年には46万人が訪れる観光名所となったのである(図表2)。

図表2 浜辺での写真撮影の様子

(3) 交流人口・関係人口受け入れに応じた事業者の活躍

さらにこの浜辺の観光地化とほぼ時を同じくして、B市内では、一棟貸しの宿泊施設やゲストハウスの複数オープンや、市所有の観光・保養施設の指定管理者の刷新、地域食を提供するレストランやゲストハウスのオープンが相次

いでいる。これらは、主に30～40代の地元事業者がそれぞれ興しているものである。しかしながら、事業者同士は、2010年代半ばごろに実施されたB市観光基本計画策定以来面識がある。彼らをつなぐ組織はないが、緩やかなつながりを維持しており、必要に応じて協働もなされている。

【研究方法・研究内容】

A 島における第 4 回芸術祭にかかわる動きをみてみよう。

1. 二年連続同一アーティストによる AIR 活動

2018 年、2019 年の AIR では、初めて、同一アーティスト 2 組が 2 年連続で AIR アーティストに指名された。これは、会期前年にあたる 2018 年の制作活動とその作品が島民から高い評価を得て、第 4 回芸術祭の「わたしたちのアーティスト」としての指名を島民から受けたこと、アーティスト自身も同芸術祭において出品したいとの想いを抱いたこと、そして、作品のクオリティも担保されていたことによる。

両アーティストは、環境・自然・生命といった共通するコンセプトを下敷きとし、それぞれの表現方法によって作品制作をおこなった。会期中は、個別展示もなされたが、両アーティストの作品が共存する空間も設えられた。

2 年にわたってアーティストとコミュニケーションをはかりながら、作品制作に従事してきた島民が少なくなかったことと作品の迫力から、島内でのこの作品への愛着と評価は圧倒的であった。B 市においても第 4 回芸術祭の A 島を代表する作品の一つとして紹介されることが珍しくなかった。

2. 市独自ボランティア組織

瀬戸内国際芸術祭の運営方式の特徴のひとつは、こえび隊というボランティア活動制度である。しかし西部に位置する A 島においては、地理的状況等の都合で、こえび隊の充当が期待できない側面もある。そこでこれを代替する芸術祭の準備・運営を支援するボランティア制度を B 市が独自に設け、第 4 回においても運用した。

登録が完了すると、作品制作の協力要請と実施日時や、会期中の受付支援募集がメール配信され、登録者は都合に合わせて参加が可能となっていた。頻度や活動時間を強要されることはないため、気軽な参加が可能なくみとなっていた。発表者が制作準備に参加した際には、島出身の夫と妻が終日、午後から島出身で高松市内在住の女性とその友人（大阪在住）が参加していた。

3. 多様な運営従事者

会期中の運営（受付、誘導等）には、市役所職員、島民のほか、商工会や地元のまちづくり NPO、ボランティア登録者などが従事した。運営・来訪者対応で島民が奔走するという様子はみられなかった。

4. 非公式作品の公開

A 島には、第 2 回芸術祭出展作品で、第 2 回閉幕後もある島民 N（本人も作品の一部）の手弁当で維持管理・定期公開されている知名度の非常に高い作品がある。N 氏が作品空間にいることにも意味があるこの作品は、前回第 3 回においては会期中常時公開をしていたが、今回は、高齢である N 氏の体調等に配慮し、週末のみの作品公開となった。

5. 市民による事業展開—ガイド・物販・飲食・宿泊・閉幕後の作品展示—

A 島では、芸術祭公式事業の周辺で、この機を捉えた実践も複数展開された。たとえば、地元まちづくり NPO は地元小学生による A 島ガイドツアー（有料）を実施した。小学生は年度当初から定期的に島を訪れ、島民への聞き取りや島あるきを重ね、歴史文化についての理解を深め、その学習の成果をツアーのなかで紹介してくれた。

養殖業に従事する夫婦が期間限定曜日限定で 2018 年にオープンした地元食材をふんだんに使った食を提供する食堂は、連日、長蛇の列ができていた。また、普段は締まっている店舗を利用した島の女性有志による喫茶営業、先述の N 氏が関わる作品施設内での N 氏親族による不定期のコーヒー販売、遠洋航路の元料理人は自家製カレーの販売、AIR アーティストの作品制作にかかわった女性たちによる作品をモチーフにした手作り小物販売（バック、ネックレスなど）などもおこなわれていた。

さらに、先述の AIR アーティスト作品が閉幕後も空間ごと保存されることになったことを受けて、アーティストの生活面のサポートも含め、作品制作に伴奏してきた島内在住の S 氏を中心に、今後の作品の維持管理や来訪者対応をおこなっていくことになった。

6. 観光関連事業者の限定的な関与

第 4 回芸術祭に際して来訪者に対し積極的な情報提供、支援をおこなった事業者は観光交流局である²。芸術祭開催に合わせて、JR の駅に隣接する空き店舗に事務所を移し、公共交通機関を使って A 島（や先述のインスタ映えの浜辺

等)に出向こうとする来訪者の支援をおこなった。

ところで、同市内では、これ以外には観光関連事業者による芸術祭を商機と捉えた積極的な事業展開はほとんどみられなかった。ある事業者からは、来訪者がサービス提供を求めるのであればそれに応じる用意はあるが、3年に一度というのはあまりにロングタームであるのと声が挙がっていた。

【研究・調査・分析結果】

これらのデータから浮き彫りになる点は3つある。

まず、A島においては、瀬戸内国際芸術祭の枠組みに準拠しながらも、同市ならびに同島の立地や島民の意向等を勘案し、部分的に独自性のあるかたちで芸術祭が実施されている。これは前回の3回の芸術祭時にも確認できた様相で、今回はこれが定着したといってもよいだろう。橋本の議論を援用するならば、これを地域化のかたちのひとつと捉えてもよいかもしれない。つぎに、芸術祭の公式・非公式事業にかかわらず、いずれの芸術祭関連事業においても、それに関与する人びとは(本務としての従事者をのぞいて)、楽しみの延長線上で一連の実践に関与している点を挙げられる。島民にあつてはとくに、継続のため、来訪者のために犠牲を払うという姿勢はほぼ皆無で、従来のような、もてなす側(≒ホスト)の様相もみられない³。

そしてさいご3点目として、冒頭の問題の所在でも指摘したように、現時点では、会期外においても(一部作品鑑賞は可能であるものの)会期中同様のアート鑑賞の機会提供が難しいことから、アートツーリズムのビジネス化には至っていない点が挙げられる。観光関連事業者もこの点を十分に理解していることから、芸術祭への過度な期待は抱いていない。地域/観光資源のなかのひとつとして捉えられているに過ぎない。

【考察・今後の展開】

最初の問いに戻ろう。次なるステージに歩を進めた瀬戸内国際芸術祭の実施は、開催地—とりわけ、会期外におけるアートツーリズムビジネスが成立しない地域—においていかなる意味があるのだろうか。事例からも明らかのように、直接的かつ恒常的な経済効果の創出という観点からみると、芸術祭は必ずしも意味があるとは言い難いだろう。しかしその一方で、個々の興味関心と余裕に従った能動的な楽しみの機会創出の場となっている点は大いに意味がある。楽しみのいうと、建設的な意義・価値が必ずしもないもののように受け取られるかもしれないが、この実践にお

いては、地域を知る・新たなる技術を獲得する・知恵や技術を活かす・新たなる社会関係を構築するといった社会をつくる要素が包含されている⁴。

また橋本が論じる地域化だが、芸術祭の現地においては、橋本が定義するように地域化は進展していない。むしろそう進展しないところに芸術祭の維持・洗練の肝があり、加えて地域化は別のかたちで立ち現われるのではないか。これについては発表の場で議論したい。

【引用・参考文献】

- ・ 香川県(2015)『新・せとうち田園都市創造計画』(PDF版)
- ・ 香川県(2017)『香川県離島振興計画(平成25年度～平成34年度)(平成29年度12月変更)』(PDF版)
- ・ 香川県商工労働部産業政策課(2013)『香川県産業成長戦略』(PDF版)
- ・ 香川県政策部文化芸術局(2018)『香川県文化芸術振興計画(平成30年度～平成34年度)』(PDF版)
- ・ 瀬戸内国際芸術祭実行委員会(2020)『瀬戸内国際芸術祭2019総括報告』(PDF版)
- ・ 日本銀行高松支店・瀬戸内国際芸術祭実行委員会(2020)『「瀬戸内国際芸術祭2019」開催に伴う経済波及効果』(PDF版)
- ・ 橋本和也(2018)『地域文化観光論』ナカニシヤ出版。
- ・ 山田香織(2017)「地方国際芸術祭のローカル化と地域振興」地域活性学会第9回研究大会発表要旨集、pp.238-241.
- ・ 山田香織(2019)「アートプロジェクトにおける観光文化の創造—地方開催の国際芸術祭運営に関わる人々の協働と住民のアート実践」橋本和也編著『人をつなげる観光戦略』ナカニシヤ出版、pp.144-164

本研究成果は科研(基盤C:18K11841)の助成によるものである。

1 ベネッセアートサイトを構成している犬島もここに加えてもよいかもしれない。また、芸術祭開催以前から観光目的地として知名度のあった小豆島も、こちらに加えてもよいかもしれない。

2 観光情報の提供や広報活動をおこなう市の外郭組織である。

3 聞き取りによれば、第3回においては若干の犠牲を伴う運営従事がなされていたようである。これについては今回実施されなかった。

4 これについてはいま一步議論を深める必要がある。